

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介します



合田 直弘

アマチュア時代を含めて25年にわたった騎手生活に、5月1日をもつてヒリオドを打ったルビー・ウォルシュ(40歳)が、今回のこのコラムの主役である。

この日、愛国のパンチエスタウン競馬場における開催で騎乗していたウォルシュは、メイン競走のG1パンチエスタウンゴールドC(芝24F120Y)をケムボーイ(驕7、父ヴォウドゥノール)に騎乗して優勝。通算213度めのG1制覇を果たして引き上げて来るなり、「これでお終い。私が競馬に乗る姿を見ることは、もう2度とありません。私の騎手生活は終わりです」と宣言し、競馬サークルをおおいに驚かせたのである。

元アマチュア騎手チャンピオンで、その後調教師に転身したテッド・ウォルシュの長男として、79年5月14日に愛国のキルデアで生まれたのがルビー・ウォルシュだ。ルビーというのは実は愛称で、本名はルパート・エドワード・ウォルシュという。初騎乗は16歳の誕生日を迎えたばかりの95年5月17日で、父の管理馬ワイルドアイリッシュに騎乗し、レバースタウンで行われたナショナルハントフラットに参戦。5番人気の同馬で5着という、可もなく不可もなしという結果に終わっている。初勝利はほぼ2か月後の同年7月15日で、サイレンソングに騎乗してゴウランパークの

ナショナルハントフラットに優勝。同馬を管理していたのも、父のテッドだった。

2シーズン目の96/97年にアマチュア騎手チャンピオンのタイトルを獲得。またアマチュアだった98年のチエルトナムフェスティバルで、ウイリー・マリンス厩舎のレグザンダーバンケットに騎乗してG1チヤンピオンバンパーに優勝し、G1初制覇を果たしている。そしてこれが、チエルトナムフェスティバルにおける初勝利で、後にフェスティバル・キングと呼ばれることになった彼の伝説は、実にここからスタートしたのだった。

プロとなった98/99年シーズンに、いきなり愛国におけるチャンピオンジョッキーの称号を獲得。以降、12度にわたつてこのタイトルを手中にしている。

ウォルシュにとつて現役生活のハイライトの1つが訪れたのは、00年の4月だった。父テッドが管理するパピヨンでグラランドナショナルに参戦。見事に優勝を果たし、若干20歳だったウォルシュはグラランドナショナル初騎乗初制覇の快挙を成し遂げている。

04年のG1クイーンマザーチャンピオンチエイスを、ポール・ニコルス厩舎のアザーティオプで制したのが、チエルトナムフェスティバルにおける4大競走の初制覇で、同時にこの年に初めて、チエルトナムフェスティバルの開催リーディングを獲得。

以降、17年まで通算11度にわたつてフェスティバル・リーディングの座に就くことになった。

G1キングジョージ6世チエイスを5度制したのをはじめ、通算で16のG1に勝利したゴートスター、ウインクスに破られるまでG1・22勝という世界記録を保持していたハリケーンフライ、09年から12年までG1ワールドハードルを4連覇したビッグバックス、09年から12年にかけてチエルトナムフェスティバルのG2メアズハードルを6連覇したクヴェガなど、彼が主戦を務めた名馬の名を挙げれば、枚挙に暇がない。

ルビー・ウォルシュには日本での騎乗経験もある。13年にバガサスジャンプSと中山グラランドジャンプに参戦したウイリー・マリンス厩舎のブラックステアマウンテンに騎乗。中山グラランドジャンプで見事に勝利を収め、日本における初勝利を挙げている。ちなみにこの時の1着賞金6556万円(約46万5162ポンド)は、ウォルシュが1レースで稼いだ賞金の最高額として記録されている。

愛国と英国における通算勝利数2756は、トニー・マッコイ、リチャード・ジョンソンに続く、歴代3位の記録となった。今後は、競馬解説者の道に進む予定だ。